

シャーロット・ブロンテの習作にみる叙事詩的要素とリアリズムへの変容

19世紀の叙事詩との関連において

馬淵 恵里

はじめに

シャーロット・ブロンテ (1816-55) が、1829 年頃から約 10 年にわたり弟のブランウェル・ブロンテと創作した、西アフリカの架空の国家グラスタウン連邦を舞台としたグラスタウン物語・アングリア物語と呼ばれる習作群は、勇士たちによる西アフリカでの植民地建国に始まり、王国連邦の興隆と崩壊、先住民族との攻防を含む幾多の戦争や政治動乱を描くものである。それゆえ、ブロンテきょうだいの初期作品研究の草分けであるファニー・E・ラチフォードが習作群を“epic cycle”と呼んだことに代表されるように (xiv)、それらはしばしば“epic”と形容されてきた。じっさい、初期作品全体を概観するとたしかに叙事詩的であると感じられるが、初期作品における叙事詩性は一様ではなく、執筆時期によって変化が見られる。本発表では、その変遷を、19 世紀の叙事詩の潮流と関連づけて考察することで、シャーロットの創作を同時代の文学史的な文脈の中で捉え直し、19 世紀における〈小説〉と〈叙事詩〉の影響関係の一端を明らかにすることを試みた。

初期習作 (1829-32) における叙事詩性

グラスタウンの始まりを記す最初期の習作“A Romantic Tale” (1829. 4) は初期習作の中でも特に叙事詩的な色合いの強い作品である。西アフリカに漂着した勇士たちが先住民アシャンティ族を撃退し、守り神の助力を得てグラスタウンを建設したことや、勇士の一人アーサー・ウェルズリーがナポレオン戦争から凱旋し国王に即位したことなどを記すこの作品では、*The Epic: A Very Short Introduction* の第 1 章で示される〈叙事詩〉の定義どおり、人間の英雄による「戦争、探求、移住、帰郷の旅」が「共同体に影響を与える重大な営み」や「共同体の文化的遺産」として提示されている。また作中には、*The Epic* 第 1、6 章で叙事詩の伝統的な要素として言及されている、英雄が超自然的存在と対峙する場面も登場する。初期習作に見られるこのような叙事詩性は、シャーロットが愛読誌 *Blackwood's Edinburgh Magazine* を手本に当時の政情や探検旅行、海外植民地の情報を取り入れて作品を書いた結果の副産物とも見做せるが、初期習作には *The Epic* で挙げられているその他の〈叙事詩〉の要素も散見されることは見逃せない。たとえば“The Search after Happiness” (1829. 7-8) と“The Adventures of Ernest Alembert” (1830. 5) には、*The Epic* 第 6 章で取り上げられている冥界訪問とそれを通じた現実世界との絆の再確認という叙事詩の要素が見出せるほか、グラスタウン物語の主人公が国民的英雄ウェリントン公爵であった点は極めて重要であろう。“Characters of the Celebrated Men of the Present Time” (1829. 12) では、軍事・政治で「非凡の才」を持つウェリントン公爵の風貌と「果断、穏健、勇敢かつ高潔」な人柄、ナポレオンの脅威からヨーロッパを救った功績が称賛される (*EEW* 1: 123-24)。こうしたウェリントン公爵の人物像はまさに叙事詩の謳う英雄そのものであり、「彼の決意は揺るぎなく確実に実践された」 (*EEW* 1: 124) との記述も *The Epic* 第 3 章の定義する英雄像と合致している。

中期習作 (1833-35) におけるパイロニック・ヒーローの模倣と嘲弄

1830 年頃からシャーロットの関心が弟の発案する戦争や政治闘争そのものではなく、その中で生きる人々の私的な生活の描写へと移行するにつれ、物語の主人公はウェリントン公爵からその長男ドゥアロウ侯爵に代わる。初期習作では知勇に詩才を兼ね備えた、父王同様の理想的な英雄像を帯びていたにもかかわらず、今やアングリア国王となったドゥアロウ侯爵ことザモーナ公爵は、中期習作では第一作目の“Something about Arthur” (1833. 5) を皮切りに野心や激情、放蕩癖を露にし、因習道徳を踏みにじり悪魔的な魅力で女性を翻弄する〈パイロニック・ヒーロー〉へと変貌する。こうした英雄像の改変はオーソドックスな〈叙事詩〉からの逸脱であり、これはまさにアデライン・ジョーンズ＝プトラやハーバート・F・タッカーが〈叙事詩〉の慣習を逸脱・刷新する叙事詩と評するジョージ・G・バイロンの *Don Juan* (1819-24) の特徴そのものである。さらに重要なのは、ザモーナ公爵というパイロニック・ヒーローが、シャーロットのペルソナである皮肉屋チャールズ・ウェルズリー卿の語りを通して風刺的に描かれる点である。たとえば“The Spell, an Extravaganza” (1834. 6-7) でチャールズは兄ザモーナ公爵の偽善を暴きその実態を晒すと宣言するが、これはジョーンズ＝プトラの指摘する *Don Juan* の風刺精神 (134-35) と一致する。加えて、物語の信憑性を自ら揺るがし虚構と真実を往還する彼の語りは、タッカーが *Don Juan* の革新性と指摘する、作品構築プロセスを読者に開示する自己意識的な語り (226-30) に通ずるものであるだけでなく、そこにはバイロン風の“mock epic”を生成しつつ同時にそれを自ら嘲弄するという、複層的で自己意識的なシャーロットの営みが読み取れる。シニカルなチャールズを介することで、彼女は自らの想像世界や登場人物と批評的な距離をとり、時にそれらの創造主である自分自身をも笑い飛ばすことができたのだ。対象の権威を突き崩すこ

の種の＜笑い＞が、ミハイル・バフチンの言う叙事詩と対照的なく小説＞の本質的特徴であることも（495-98）、初期作品における叙事詩的要素の変容という点で注目すべき点であろう。

後期習作（1836-39）におけるアングリシアからの脱却——リアリズムそして自伝体小説へ

バイロニック・ヒーローを取り巻く人間模様を描く中で、シャーロットの主眼が次第にザモーナ公爵に翻弄される女性の心理へと移行したことで作風にも変化が生じ、1836年以降、物語の語り手はより庶民的で周縁的なチャールズ・タウンシェンドに代わり、彼を媒介しない理性的で全知的な語りも増えていく。これまで依拠してきたウェルズリー卿のシニカルで特権的な男性的見地を離れ、苦悩する女性たちの現実に取り添い、それを直視しようとするシャーロットの姿勢が感じられるこの変化は、母校で忙しい教師生活を送る当時の彼女自身を悩ませていた葛藤と深く結びついていた。アングリシアの空想世界に慰めを見出しつつもそれに耽溺することへの罪悪感に苛まれていたシャーロットが抱いていた、身体感覚を帯びて現実世界に迫る空想世界とそれを創り出す自らの想像力への畏怖の念は、現実と虚構の狭間で生きる彼女がリアリズムへと舵を切る大きな一因となった。シャーロットが、“Mina Laury”（1838. 1）や“Caroline Vernon”（1839. 7-12）などでザモーナ公爵に隷従する女性や白昼夢に耽る女性とアングリシアに捉われた自分自身とを重ねて自己省察を行っていることや、1838年末頃に書かれた“*But it is not in Society that the real character is revealed*”で始まる断片で自身を模したガヴァネスを描き、“Henry Hastings”（1839. 2-3）では愛ではなく道徳と自我を重んじる不器量なヒロインを描いたことは、創作上の重要な転換である。そして遂にアングリシアという劇的な空想世界を脱し平凡な現実世界を見据えた彼女は、未完の断片“*Ashworth*”（1840. 12-1841. 3）にて語り手を“*real events*”の“*faithful chronicler*”と位置づけ（UN 21）、リアリズムの範疇で想像力豊かな物語を編むという新たな創作方針を打ち出す。リアリズムと豊かな想像力を両立させる最適な形式として彼女が最後に辿り着いたのが、等身大の彼女自身を投影した女性主人公の＜自伝体小説＞であったと言えるだろう。

むすびにかえて

伝統的な叙事詩の要素が強く感じられる初期の習作からリアリズム小説へと至る以上のようなシャーロットの創作の軌跡と、19世紀の＜叙事詩＞の潮流との間に見られる強い関連性について指摘して総括としたい。第一に、シャーロットの習作における主題の移行、すなわち冒険・戦争・建国といった伝統的な叙事詩のテーマから個人の内面探求というテーマへの移行は、詩人である自己の内面の発展や心理的葛藤を叙事詩の新たな主題としたウィリアム・ワーズワスらロマン派詩人による叙事詩の改革を想起させるものであり、19世紀前半の＜叙事詩＞というジャンルの変容と軌を一にするものであるということだ。第二に、シャーロットの想像世界が強烈な身体感覚を伴い実在化していた点は1840-50年代の＜瘡癩派＞との関連性を示唆する。しかしながらシャーロットはこの反応を全面的に肯定していたわけではなく、この点でより近い同時代の叙事詩作家はエリザベス・B・ブラウニングと言える。ブラウニングは *Aurora Leigh*（1856）で、瘡癩派的な身体性を女性特有の経験と結びつけつつ、日記形式による多視的な語りを導入することで自己中心性や自己陶醉を克服しようとした（Tucker Ch. 9）。さらに、作者自身をペルソナとして物語世界の中に配置し（*Don Juan* とは対照的に）人間性と仮面なしで向き合うという試みを通して、ロマン派の叙事詩とビルドゥングスロマンを融合させ、社会と自己を統合する新たな英雄像を提示した（Johns-Putra 139-45）。このようなブラウニングの創作意識や手法は、同様にロマン主義叙事詩を経て自伝体形式のビルドゥングスロマンに至ったシャーロットの軌跡を強く想起させるものである。シャーロットという作家と彼女の作品の形成過程を同時代の叙事詩の潮流の中に位置づけることで、19世紀に＜小説＞と＜叙事詩＞という二つのジャンルが影響し合いながら発展していったことが、改めて具体的に確認できるだろう。

引用文献

Brontë, Charlotte. *An Edition of the Early Writings of Charlotte Brontë*. Edited by Christine Alexander, Basil Blackwell, 1987-91. 3 vols. （本稿内では *EEW* と略記）

——. *Charlotte Brontë: Unfinished Novels*. Edited by Tom Winniffrith, Alan Sutton Publishing, 1993. （本稿内では *UN* と略記）

Johns-Putra, Adeline. *The History of the Epic*. E-book ed., Palgrave Macmillan, 2006.

Ratchford, Fannie Elizabeth. *The Brontës' Web of Childhood*. Columbia UP, 1941.

Tucker, Herbert F. *Epic: Britain's Heroic Muse 1790-1910*. Oxford UP, 2008.

Welch, Anthony. *The Epic: A Very Short Introduction*. Kindle ed., Oxford UP, 2024.

ミハイル・バフチン著、杉里直人訳「叙事詩と小説——小説研究の方法論をめぐって」、1941。（伊東一郎・北岡誠司・佐々木寛・杉里直人・塚本善也訳『ミハイル・バフチン全著作第五巻 [小説における時間と時空間の諸形式] 他——一九三〇年代以降の小説ジャンル論』水声社、2001、pp. 471-521.）